



設定

20xx 年。技術の進歩により生活はより便利になったが、その進歩を悪用した犯罪もはびこるようになっていた。大学教授の田代も技術を悪用しているうちの一人だ。田代は研究費を流用し、秘密裏に、はめた人間を自由にコントロールできる腕輪を開発。学生を実験台として、己の私欲を満たしていた。

腕輪で命令されるのはもちろんのこと、逆らえば腕輪の力を使い酷い命令をされるため自ら従い、従順になっていく展開です。

主な登場人物

田代（大学教授）：人間をコントロールできる腕輪を開発。真正のサディスト。熊のようながっちりとした体型。

斉藤琢磨（主人公）：3 年。レスリング部部員。友達思いで情に熱い男。175 cm 筋肉質であっさりとした顔立ち。

木村亮（琢磨の親友）：田代の研究室の学生で、琢磨と同じレスリング部部員。無邪気な性格、細かいことは気にせず明るい。180 cm 筋肉質で男らしい顔立ち。

山田俊樹（亮と同じ研究室の先輩）：4 年。陸上部キャプテン。あまり口数は多くないが、人に優しく自分に厳しい。自分の考えをもっていて、人から自然と好かれるタイプ。田代の最初の実験体にされた。田代にポチという名前を与えられている。

目撃

「琢磨、わりい、研究室に忘れ物したわ！先帰ってて。」

練習終わり、一緒に帰っているとそう言って、大学の方に戻っていく亮。

「いいよ、俺も付き合うよ。」

そう言って、一緒に歩きだす。亮とは大学からの付き合いだが、部活で知り合って以降、暇があれば一緒にいる。部活でも一緒だから他の時間は別でもいいようなものだが、亮といると気楽だし、楽しいし、いつも自然と笑っている。

「忘れ物ってなんだよ？」

「ああ、レポート作成用の資料。あーかったるい。」

「お前んとこの教授って、田代だろ？あんまい噂聞かねえぞ。パワハラ気質なんだろ？」

「ああ、確かにうるさいな、俺は結構反抗してるけどなw」

「まあ亮がだまって聞くわけないよな。」

そんな会話をしているうちに亮の研究室が入っている建物に到着する。

「あれ、まだ電気ついてる？もう21時だぞ？だれだ、こんな研究熱心なのは。こっそりのぞいてやろうぜw」

亮が無邪気に笑っている。二人で音をたてないように忍び寄り、ドアを少し開け、のぞき込む。そこには田代と、全裸の学生がいる。

「あれは、、、山田先輩、、、。」

山田は全裸になり、頭の後ろに手を組んで、パイパンのペニスをびくつかせている。

「ああ、、、ご主人様、、、変態奴隷犬のポチは興奮しておちんぽをびくつかせ、汁を垂らしています、、、。」

「うげ、、、なんだよ、、、あれ、、、。」

普段の寡黙で男らしい山田からは想像のできない姿に亮は驚いている。

「ふふふ、、大分ルールがわかってきたみたいだな。逆らえばまたきつい命令をしてやるからな、ポチ。」

「ひ、、、お許してください、、、ご命令に従います、、何なりとお申し付けください、、、。」

「それにしても、、この腕輪は本当に使えるな。我ながら傑作品だ。お前ほどに精神力の強いやつでも、命令一つで何でも実行してしまうからな。」

「はい、、ご主人様の操り人形になれてポチは、、光栄です、、、。」

ふるえながら山田が答える。

「じゃあポチ、いつものようにおねだりしろ。」

「はい、ご主人様、、、変態奴隷ポチの口とケツマンコでご主人様のおちんぽを奉仕させてください。お願いします。」

山田はそう言いながら、教授に陸上で鍛えられた筋肉質なプリケツをさらし、振り出す。山田のそのプリケツが、尻を振るたびにプリンプリンと波打つ様に教授は興奮し、下半身に血液を集めている。教授は黙ったまま、自らの陰茎を取り出し、山田にくわえさせる。

ちゅぽちゅぽちゅぽ、、ぺろぺろぺろ、、ちゅぱちゅぱちゅぱ、、。

教授のペニスをくわえながらもギンギンのままの山田を見て、琢磨と亮の二人は驚き目を見合わせる。

「よしそこまでだ。じゃあ、ポチ、俺はまだ仕事が残っている。俺が終わるまで、そこにあるデイルドでアナニーしてろ。」